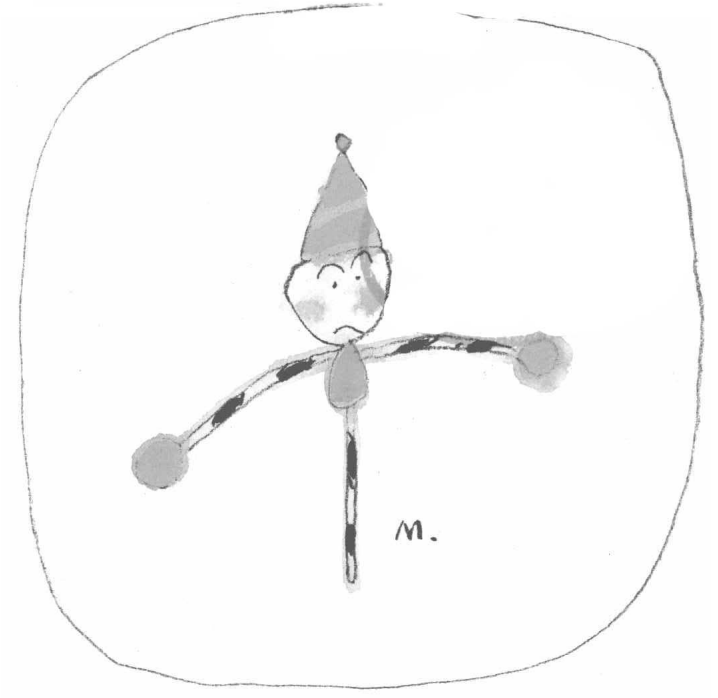
お金物語

清水義範

お金物語

清水義範



朝日新聞社

清水義範
しみずよしのり

昭和22年名古屋市生まれ。愛知教育大卒。
『国語入試問題必勝法』で昭和63年度吉川英治文学新人賞受賞。他に『蕎麦ときしめん』『永遠のジャック&ベティ』（共に講談社）『金鯱の夢』（集英社）など。

お金物語

1991年11月10日　第二刷発行

著　者――――清水義範

発行者――――木下秀男

印刷所――――凸版印刷

製本所――――青柳製本

発行所――――朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2
電話03-3545-0131(代表)

編集　図書編集室
販売　出版販売部
振替　東京0-1730

© Yoshinori Shimizu 1991

Printed in Japan
ISBN4-02-256344-3
定価はカバーに表示してあります

お金物語　目次

四十五年 5
事の初め 27
貧乏な彼 53
他人の懐 77
百億万円 101
金色夜叉 125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安住の地　149
黄金狂い　173
勿体ない　195
命の値段　219
愛と希望　241
被相続人　265

装画　村上　豊
装幀　熊谷博人

本書は『週刊朝日』一九九〇年四月十三日号から一九九一年三月二十二日号までの連載に加筆したものです。

四十五年

1

日本が今（私がこれを書いているのは一九九〇年）、かなり豊かになったということは、まあ大方の人が認める事実であろう。

もちろん、その反対の意見の人もいる。一生働いても小さな自分の家一軒持つことができなくて、なにが豊かなものか、という意見がある。それから、これから先どんどん老齢化社会になっていけば、その老人たちにどれほどのことがしてやれるのだろう、という観点から、豊かさを否定する人もある。福祉の貧困さを言う人もある。

ＣＭのコピーで何度聞かされたか数えきれないあの永遠の名作〝ほんとうの豊かさ〟と比較すれば、今の日本などまだ全然豊かでないことになる。

それは、そうである。〝ほんとうの豊かさ〟というのは、ユートピア、と言うのと同じような言葉で、どこまでいっても絶対に達成できないものなのだから。そして、〝ほんとうの豊かさ〟がどうしてもほしいと言うのは、贅沢言うのもほどほどにしろ、と言ってやるべきことなのである。いくらなんでも、そこまで望むのは欲が深すぎるというものだ。

土地の値段がバカ高くて家が持てないのは、日本の特殊な理由によるもので、それをもって豊かか、そうでないかを計ってはいけない。いや、日本の特殊性というより、東京及びそれに準ず

る大都市周辺だけの特殊性と言うべきだろう。それ以外のところなら、家は持てるのである。日本の、世帯の住宅保有率は六二・四パーセントである。アメリカはそれが六四・四パーセント、オーストラリアは六八・一パーセントだが、西ドイツは三六・〇パーセント、フランスは四六・六パーセント、イギリスに至っては三四・七パーセントしかない。小さいながら、日本人は自分の家を持っているのである。

同じ値段で、外国ならばこんなに大きな家が借りられる、とか言うのは、国の広さの問題である。

福祉には確かに貧困な一面があるが、それでも、ひところより上向きになってきている。これを言っては反則なのだが、以前にくらべれば、本当に豊かになっているのだ。

四十五年前、日本人はすべてを失っていた。そして今、世界で一、二、という金持ち国になったのである。日本のこの四十五年は、ものすごい変化である。こんな変化を体験できた国民というのは、世界史を見たってほかにはまずない。

たとえばここに、五十一歳の橋倉孝之（たかゆき）という男がいる。中堅企業に勤めるサラリーマンだ。

この橋倉は、どん底の貧乏から、金あまりだから金の地金を買おうというところまでを、一生のうちに体験しているのである。芋のつるを食べるところから、高級フランス料理を平気で食べるところまでの変化である。

考えてみれば、こんな大変化を体験できるなんて、そうはないことである。

彼が小学校に入ってすぐの頃、弁当を家から持っていったことがある。あの悪名高い脱脂粉乳の給食がまだ始まる前のことだ。その弁当を、平らにして慎重に運ばなければならなかった。揺らしてはいけないのである。

なぜなら、アルミの弁当箱に入っているのが、雑炊だったからである。米はほんの少しで、芋が主役の、水っぽい雑炊を弁当に持っていったのである。さめた雑炊はまずいのであった。

でも、雑炊であっても弁当を持ってこれればまだマシであった。何も持ってこられない子供が、ちっとも珍しくなかったのである。そういう子たちは弁当の時間になると校庭へ出て、鉄棒にぶら下がっていたりするのだ。

そういう時期のあと、アメリカの好意による給食が始まって。

あれは、とてつもないものだったなあと、今になって思い出してみれば思える。

脱脂粉乳は、ミルクとは言えないものだった。鯨肉は、粒々のイボのような筋があって、とてもではないが食いちぎれない部位であった。ブタ肉もしかりである。マカロニは気持ち悪く、野菜はクズのところばかりだった。

それを、うまいと思って食べたのである。

慢性的に腹が減っているから。

家で食事をとることになり、兄弟が並ぶ。どの皿のおかずが大きいか、まず瞬間的にそれを見る。そして自分にその大きいのがまわってくると、最高に幸せな気分になれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その頃は、甘いものイコールうまいものであった。チョコレートは、宝石であった。三年に一度くらいしか、そんなものは口に入らなかった。小学校の高学年になった頃、橋倉孝之は鉄の下駄をはかされていた。歯が減らないからその下駄がいいというわけだが、重かった。

それでも、彼には親があり、学校へ行かせてもらえるだけでも恵まれていた。同じ年頃の子供で、家も親もない浮浪児がいっぱいいた。そして、そのうちの何割かは、死んでいった。

家の近くに鉄工場があり、そのすぐ横の道端に、工場が捨てるゴミの山があった。旋盤でけずられたスプリングのようにくるくるねじれた鉄片とか、折れた金ノコの刃とかが、捨てられているのだ。

その鉄っぽいゴミの山をかきまわして、溶けた真鍮のクズを拾う、ということをよく彼はした。缶詰の空き缶に、小さな真鍮の破片を拾い集めるのだ。多少の量にまとまると、それをクズ屋に売る。それは十円とか二十円になった。その金で、干し芋などを買って食べるのだ。

服にはつぎが当たっていた。冬物の靴下などは、つぎ当てだらけでもともとの二倍くらいの厚さになっていて、はき心地が悪かった。鉛筆は、どんなに短くなっても補助キャップのようなものを取りつけて使った。

彼が中学生になる頃には世の中に多少はモノが出まわり始めていたが、それでもごはんに麦がまじり、ジュースは割安の粉末ジュースしか飲まなかった。学生服は一着しかなく、洗濯をしないからピカピカ光っていた。

高校に入って万年筆を買ってもらえたのが、胸が熱くなるほどの喜びだった。これで、穴のあいているズック靴が買い替えてもらえればそれ以上の幸せはないと思ったが、そこまでの望みはかなえられなかった。

よく、ごはんにかつおぶしをかけ、しょうゆをかけて食べた。きな粉をかけて食べることもあった。卵かけごはんは贅沢品であった。

食パンにマーガリン、という食事の時もよくあった。コッペパンにマーガリンさえなし、という時もあった。家にトースターが来たのは、彼が高校一年の時であった。

橋倉孝之は、高校である程度勉強をしたのだが、国立大学に入学できるところまではいかなかった。彼は私立大学へ入りたいな、と思った。

しかし、それはもちろん無理な願いであった。姉とか弟たちも沢山いて、子供を私立大学なんかへ行かせられるわけがなかったのである。

高校を出て、彼は運送会社に就職した。そののち、そこをやめたり、うろうろしたり、やっと自分に合う会社を見つけたりと、彼の人生のドラマは進行していくのだが、それはさておき。

初めて仕事について彼がもらった給料は、九千八百円であった。そこからすべてが始まったのである。

2

「どうするの。あの子、クルマ買ってほしいって言ってるわよ」

と、橋倉孝之の妻の澄子が言った。あの子、というのは彼らの息子の直也のことである。

「クルマか。まあ、そのくらいのものは買ってやらなきゃしょうがないだろうなあ。よく頑張ったんだから」

直也はこの春、一浪したあげくにやっと大学に入ることが決まったのである。

「でも、なんか高そうなこと言ってるわよ。百五十万円くらいのがほしいんですって」

「今はまあ、そのくらいするわな」

「本当は外車がほしいんだけど、それだとすぐに五、六百万いっちゃうから、国産車で我慢するんだって。言ってくれるわよねえ」

ははは、と橋倉は笑う。

「まあ、大学に入ってくれたんだからそのくらいの褒美はしょうがないか。買ってやることはできるんだからな」

そうなのである。終戦から四十五年たって、五十一歳になった彼は、息子に大学合格の褒美に百五十万円のクルマを買ってやれるようになってしまったのだ。初めてもらった給料が九千八百

円のところから、ここまで来てしまったのだ。

息子の直也は、一年目も二年目も、十以上の大学を受験したのだ。受験料だけでも何十万円である。そして浪人して予備校に払ったお金が約八十万円。そして目出たく合格して、そこに納めた入学金その他が約三百万円。それだけ出してなお、褒美に百五十万円のクルマを買ってやれるのである。

「そんなに甘くていいのかしら。学費だってかかるし、それとは別に家のローンだってあるし、楽じゃないのよ」

「でもまあ、やってやれるんだからいいじゃないか」

橋倉は、自分の家も持っているのだ。三十五歳の時に、三十年ローンを組んでそれを手に入れた。通勤に二時間かかる場所なのだが、何であろうとマイホームを持っているのである。地価の狂乱上昇の前に、家を持ったのは彼の幸運であった。今からなら、ちょっと家は持てないであろうと思えるのだが。

ローンは決して軽い負担ではないが、それより、買った土地がこのところぐんぐん値上がりしているので笑いが止まらない。近所に新しくできた建売住宅の値段をきくたびに、わっ、そんなにするのかと、顔がほころぶ彼なのであった。

そういうわけで、彼は家持ちである。

そしてそのほかに、息子にクルマくらいはポンと買ってやれるのだ。

「でも、麻子のことだってあるのよ」
麻子というのは直也の姉で、今度大学四年生になる。
「麻子がどうした」
「あの子、大学生のうちに海外旅行をしたいって言ってるのよ」
「ああ、海外旅行ね」
「友だちから誘われるらしいの。卒業記念にヨーロッパを一周、というのが最近では普通のことらしいのよ」
「そうか。百万くらいかかるな」
「親はたまらないわよね」
「まあそうだが、そのくらいは出してやれるんだからさ」
橋倉は、それを出してやる気でいるらしい。
「あなたは子供に甘すぎるのよ」
「うん。そうかもしれんがね、できるんだからしてやればいいじゃないか。おれがあいつらの頃には、貧乏でできなかったから大学だってあきらめなきゃいけなかった。それを、長い間くやしく思ったものだよ。だからおれは直也にはどんなことをしてでも大学に入ってほしかったんだ」
「それは私もわかっているわよ。私だって昔の貧乏な時代は知ってるもの」
「それが、今はここまできたんだ。何でもできるだけのことをしてやりゃいいじゃないか」

「でも、麻子は女の子だから、いずれお嫁に出さなきゃいけないのよ。その時にはお金だってかかるんだから」

「まだ、それはかなり先のことだよ」

そうでなければ、という顔をして橋倉はそう言った。

「でも、近頃は結婚式がすごく派手になって大変らしいわよ。式だけで六百万とか七百万もするっていうんだから」

橋倉は力強くうなずいて、こう言った。

「してやろうじゃないか。世間並みのことはちゃんとしてやらないとな」

日本人は、何百万円という単位のお金を、ドカドカ使えるようになったのである。こんなにすごい変化があるだろうか。

若い世代の人間は、そういう時代しか知らないから、特に変なことだと思わないのであるが、この四十五年をずーっと知ってる人間にしてみれば、よくよく考えてみると奇跡のような移り変わりである。雑炊の弁当から、七百万円の結婚式まで来てしまったのだ。

橋倉は特別の人間ではない。家のことだけは、幸運なタイミングでそれを手に入れていないと、一生持てないかもしれないが、それ以外のこと、つまり入学祝いのクルマや、卒業記念の海外旅行や、七百万円の結婚式は、普通のお父さんに、してやれることである。

逆に言うと、そのくらいのお金はちょうど一番出しやすいのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com